



時代の変化と価値計算の変化

(1月のごあいさつ)

平成25年1月10日(木)

新年おめでとうございます。お正月に Mr.マリックの奇術大国を見ながら、奇術師は事前完全準備、詐欺師は直前不完全対応だと感じました。

産業革命の成果である産業資本主義の時代が成熟し、供給が需要を上回る時代となり、経済価値の考え方が変化した。そして、貨幣が交換手段を超えて、価値そのものと錯角するようなマネー経済へと、大きな変動を経験したが、その限界をも体験することとなった。グローバル化した経済は、国内を超えて資源と低賃金の労働力によって価値を求める産業資本主義の方法であるが、スケールメリットを追求するようなその方式にも限界が見えてきている。このような物と金の追求による価値(幸福)の限界が、企業の対象とする財と経済価値の考え方の変化を促進しているように見える。

産業資本主義の時代(国内生産)

それは、目に見える工場生産による企業の国内利益の追求であり、そのビジネスモデルは、工場を建設し、資源を開発して、低賃金の労働力により生産を行うという、物的経済の時代である。欧米が先鞭をつけたこの方法により、日本は世界経済のトップレベルにまで躍り出ることができた。物の充足が経済の発展、社会の価値(幸福)と自然に考えられるような時代である。

グローバル化の時代(海外生産)

社会主義ソヴィエトが崩壊し、世界の一体化が進むとともに、再びグローバルレベルでの工場生産による資源と低賃金によるスケールメリットの追求が世界経済を牽引するかのように見られているが、それにも限界を見せはじめている。

供給過剰の時代(マネー経済)

1980年代に至って、全世界的に供給が需要を上回る時代へと突入し、もはやスケールメリットの追求だけでは市場を制覇することが出来なくなった感となった。

交換手段としてよりも富の蓄積としてのマネー経済への変化は1985年のプラザ合意が分岐点となって、それまでの実物経済とマネー経済の比率が逆転した。デリバティブに見られるようなマネーの蓄積によって価値を求めるマネー経済時代への移行が新しい時代の価値(幸福)と考えられたのである。しかし、その暴走は、アジア経済危機、サブプライムローンやリーマンショックの恐ろしさとなって現われた。

差別化の時代(知的生産)

産業資本主義、マネー経済、グローバル化の行きつく先には何があるか。資本主義自由経済は次々と地球上の資源を消費しつくすようにも見える。

今は大規模化や派手さよりも、何か差別化(知恵)というか、一つのことじつくりと取り組む時代のような感じがする。

(会計的企業価値の計算の変化)

損益計算書(生産財) ⇒ キャッシュ・フロー計算書(金融財) ⇒ 付加価値計算書(知的財)